

先週は、ヨブ記の話をしました。ヨブの身に起こった不幸は、ヨブが悪かったからでもなければ、神様がヨブをいじめようとしたからでもない。原因は、この両者のどちらでもない、別の所にある。その原因から起こる不幸に対して、神様にもできないことがある、という話をしました。

しかし、「神様にもできないことがある」と言うと、それでは、ニケヤ信経や使徒信経で、「全能の父である神を信じます。」と信仰告白をしているのは間違いか、ということになります。少し説明しておかなければなりません。

聖書に「全能者」という言い方が10回出てきます。ほとんどはヨハネの黙示録です。これは「万物の支配者」という意味なので、神様の原理的な能力よりも、むしろ神様の支配範囲が、すべてに及んでいるという意味だと言われています。ニケヤ信経では「全能の父」のあと「天地とすべて見えるものと見えないものの造り主」を信じます。と説明しています。つまり、全能とは、すべてを造り、神様の法則に従って、動かしている神様の働きを説明する言葉なんですね。

先週の説教をしたあと、アメリカで今から40年以上前にできた「オー！ゴッド」という映画を改めて観ました。スーパーマーケットに勤める店員に神様が現れて、「自然破壊や殺人をやめて、もう一度神様からの命令を聞いて、生き方を改めるように、人々に言え！」と言うのです。店員は「あなたは、神様なんだから、自分でやればいいじゃないですか！」と言います。しかし、神様は「私は世界を造ったあと、お前たちに任せた。」と言うのです。そして、店員が「たまには問題解決のために奇跡をおこなったらどうか？」と問いますが、「奇跡はどれもキザでな、自然の調和を壊す。」と言うのです。「たまにはやるけど。」と付け加えていました。そして、「紅海も、二つに分けた。」とも言いました。

まあこの映画は、ちょっとコメディみたいなものですが、すべてを神様任せにしたり、逆に神様を無視して、自分勝手に生きている人間には、反省を促す良い映画だと思いました。宮崎や延岡では、時々こんな映画を紹介していました。

さて、今日の福音書は、マルコによる福音書5章の後半に出てくる、ユダヤ教の会堂長ヤイロの娘が死んだ、らしいのですが、イエス様によって生き返ったという話です。しかし、その間にはイエス様の服に触れた女性が、12年出血が止まらない病気だったのが癒された話が省略されています。今日のお話の最後に、ヤイロの娘が12歳だったことが出てくるのは単なる偶然でしょうか。結局、ヤイロの娘が生まれた頃から、このイエス様の服に触れた女性はずっと病気だったということでしょう。

そして、このふたつの奇跡物語には、どちらも癒しを求めている者の信仰が問われている、ということに気づいていただきたいのです。ヤイロの娘の奇跡は、娘ではなく父親の会堂長ヤイロが、『イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。』と必死で頼んでいます。ユダヤ教の会堂長というのは、自ら礼拝を司式するわけではありませんが、会堂での取りまとめ役であり、ユダヤ教社会の中にあっては、人々から尊敬されている人です。

ところがその会堂長ヤイロがなりふり構わず土下座して、伝統的なユダヤ教とは敵対するような、若いよそ者の青年に頼んでいるのです。このイエス様に頼めば、きっと治る、という信仰があったのでしょうか。その後、会堂長の家に向かう途中で、家の人々が、ヤイロの娘が死んだことを告げるのですが、イエス様は、そんな話は意に介さず、「恐れることはない。ただ信じなさい」と言うのです。

今日の福音書では省略されている、12年出血の止まらない女性についても同じことが言えます。ユダヤの社会の中では、このような病気の人々は、汚れている、ということで、人々から離れて生活しなければなりません。だから、気づかれないように、正面からではなく、そと後ろからイエス様の服に触ったのです。『「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。』とマルコ福音書の著者は解説しています。そうすると、癒されたあと、イエス様は、『「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らさなさい。」』とされています。

さて、この二つのお話には信仰があることが大切な条件になっています。実は先週の福音書と来週の福音書も、信仰が問題になります。先週は、イエス様や弟子たちの乗った舟が嵐にあってしまったお話でした。その時、『イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。』

というところですが、この最後の言葉は、英語では『Do you still have no faith?』(おまえたちには、まだ信仰がないのか?)とされているんです。

そして来週の福音書は、イエス様がナザレに帰った時、人々から受け入れられないお話です。最後のあたりにこんな言葉が出てきます。『イエスは、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」と言われた。そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやさただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。そして、人々の不信仰に驚かれた。』

あれほど、あちこちで奇跡を行われたイエス様も、故郷のナザレでは奇跡が行えなかったことが書かれています。これは、先日のクシュナー先生の息子の病気が治らなかったこととも関係があるかもしれません。それはクシュナー先生に信仰がなかった、というのではなく、いくら信仰があっても、神様にだててできないことがある、ということにつながるように思うのです。ここでは、イエス様がいくら頑張っても、相手に信仰がなければ、奇跡は起きない、とマルコによる福音書は語っているのです。

それから、私はヤイロの娘が死んだのに、本当に生き返ったのだろうか、と不思議に思います。

ヨハネによる福音書の11章に出てくるベタニアのラザロが死んだことについては、死んでから四日も経っているので臭くなっている。これははっきり死んでいる、ということですが、これはイエス様の復活を暗示しているものと思われます。何か別の意図があって、このような話ができたのでしょうか。

しかし、例えば、ルカによる福音書7章に出てくる、ナインの町のやもめの一人息子が死んで、葬式の棺が担ぎ出される時、イエス様は、「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」とされました。

今日の福音書の言葉と似ています。

今日の所では、「タリタ、クム」、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という言葉でした。私はこの、ヤイロの娘とナインのやもめの一人息子は、実は仮死状態だったのではないか。古代イスラエルでは、人が死ぬと24時間以内に墓に入れなければならなかったようです。臭いまま家におけないからでしょう。しかし、日本では現在は逆に、死んで24時間過ぎないと、火葬してはいけないことになっています。それは、本当に死んでいるのか、仮死状態なのかはつきりさせるためです。

日本の習慣であるお通夜というのは、本来は死んだと思っている人の魂を呼び戻して、生き返らそうとした名残だそうです。医学が現代のように発展していない時代には、死んでいると思っても、たまに息を吹き返すことがあったのでしょうか。

イエス様は、人々が死んだと思っている家族に、諦めずに最後まで活かすように努力をさせようとしたのではないか。みんなが絶望に陥っている時、最後まで必死で力を尽くすことを望んでおられるのではないか、と思うのです。

イエス様の時代より850年から900年くらい前の時代、イスラエルには、エリヤとかエリシャという預言者がいました。そして彼らは小さな子どもが死んだ、というのでやってきて、その体の上に自分の体を重ねて、蘇生させたお話が、列王記上17章ではエリヤ、列王記下4章ではエリシャが呼ばれて、それを行なって、絶望していた親を慰めた話が出てくるのです。

実際に仮死状態だったのを、蘇生させるために人工呼吸をしたのか、あるいは子どもの死で悲しんでいる人に、立ち直らせるための働きかけを、奇跡のように表現したのか、それはわかりません。

しかし、そんな働きかけをイエス様が行い、それに応える信仰がある時、本当の奇跡はおこるのではないか、ということを私は思うのです。

この前のエクソダスの映画。引き潮の浅瀬を渡ったモーセたちの行動に、私は似たものを感じたのでした。普通の自然現象であっても、それが人々を励まし、大きな力を与えてくださることがある、其れを聖書の時代の人々は、奇跡という言葉で表現したのではないかと私は最近思うようになりました。